

当報告の内容は著者の著作物です。

Copyrighted materials of the author

第1回（通算第14回）基幹研究「人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関」公開セミナー

平成24年6月28日（木）15:00-19:00 AA研306号室

東南アジア海域世界における海賊の人類学的研究

ーフィリピン南部スールー諸島の事例を中心に

床呂郁哉（AA研）

（報告要旨）

本報告では東南アジアにおける海賊に関して報告者のフィリピン南部からマレーシア領ボルネオ島北部沿岸にかけて位置するスールー諸島を中心としたいわゆるスールー海域世界における事例を中心に報告を行った。スールー海域世界では、海賊は前植民地期から続く伝統的な生業のひとつであり、スペインなど欧米植民地主義者の側から「海賊」と名づけられた行為には、スールー王国のスルタンや貴族が公的に組織して実施した、奴隷掠奪遠征などが含まれていた。スールー海域世界において前植民地とくに18世紀から19世紀にかけてはスールーを拠点とする海賊集団が艦隊を組んで西はスマトラ島から東はパプア・ニューギニアまで東南アジア島嶼部の全域にわたって遠征したことで有名である。この当時、スールーの海賊集団は最大で全長30m近く、重量約6トンの船を使用し8から24ポンド砲、槍、クリスなどの武器を備え、遠征では最大100隻前後までの艦隊を組んで巡航した。この前植民地期のスールーについて詳細な歴史的研究を実施したJ.ワレンの研究によると、海賊の遠征の目的は奴隷の獲得であった。この奴隷の一部は、当時盛んだったスールー王国を中心とする長距離海上交易の輸出品であったナマコやフカヒレなどを採集・加工するための労働力としても大きな需要があった。この種の「海賊」行為は、実際にはスールー王国の海産物交易と直結した労働力確保の意味合いが存在していた。

そしてスールー海域世界が国民国家へ編入された第二次世界大戦後も、海賊たちの活動は止むことはなく、1990年代以降の現在においても海賊の活動は極めて盛んであり、報告者のフィールドでの知見をもとに同地域の海賊について報告と検討を行った。その概要は次の通りである。

まず現在のスールー地域で「海賊」に対応する言葉はムンドゥというが、これは海賊や「無法者」の総称であり、この他にもスールー王国時代の伝統的な奴隷掠奪をするサルスやパガヤウなどと呼ばれる海賊、海上で待ち伏せ・追跡するクルクルと呼ばれる海賊などのように、そのスタイルに応じて分類されている。また大雑把に言って陸地襲撃型、海上待ち伏せ型、船乗っ取り（ハイジャック）型などの形態で分けることも可能だ。実際には

「専業」の海賊は少なく、たいてい普段は交易や漁労など別の生業に従事している者がほとんどである。こうした多様な海賊の実際の姿を明らかにするために、次に私がフィールドで出会った、ある（元）海賊のライフヒストリーを中心に報告を実施した。

また 1990 年代以降の海賊の特徴について述べると、かれらは日本やアメリカの高性能エンジンを搭載したスピードボートに乗り、M14、M16 といった自動小銃で武装し、アイコムと呼ばれる日本製の携帯無線機で連絡を取りながら襲撃するといった「近代化」されたスタイルが目立つ。ただし注意すべきなのは、現代の海賊たちのあいだでも各種の護符や秘儀的知識などが相変わらず強く信仰されていることだ。とりわけイルムと呼ばれる秘儀的知識、およびそれに結びついた儀礼等の実践には海賊の身体を銃弾が貫通しない不死身の身体にするものや、さまざまな危険を前もって知らせる予知能力を与えるものなどがある。

この他にもスルー海域世界における多様な海賊の実態を明らかにするために、報告者は歴史的史料、および報告者のフィールドワークによって得られた民族誌的資料に基づきながら、スルー海域世界における海賊の歴史的背景から社会・文化的背景などの側面について報告と検討を行った。